

2025年11月9日 第二礼拝 子ども祝福式
説教題『賜物』マルコ 10 章 13～16 節

主任牧師 加藤 誠

「子供たちをわたしのところに來させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」(マルコによる福音書10章14節)

今年の上半期の朝ドラ「あんぱん」の主題歌『賜物』（野田洋次郎作詞）の歌詞には、きらりと光る表現、心に刺さる言葉がたくさん出てきます。「超絶難度 G の人生をどう生きる？」と問いかけながら、最後に「時が来ればお返しする命、せっかくだから唯一無二の詰め合わせにして返すでしょう！」と呼びかけている。「超絶難度 G の人生」とは「生きるのがとんでもなく難しい人生」ということ。先日も一人の方が祈るために教会に來られました。神さま以外のどこにもぶつけようのない重たい気持ちを抱えて。聖書の言葉で何とか頑張りたい。「いつも喜んでいなさい」。神さま、喜びが見つけられません。「絶えず祈りなさい」。神さまへの祈りがいつも問いかけばかりです…。私たちにとって、生きることは決して簡単ではないのです。

その「とんでもなく難しい人生」をテーマにした歌に、野田洋次郎は『賜物』という題をつけました。彼は何を「賜物」と言ってるんだろう。借り物として与えられた「命そのもの」のことか。それとも、最後にお返しするときにその命に詰める「唯一無二の詰め合わせ」のことだろうか。ふと思い出したのが、三年前に 71 歳で主のもとに召された Y さんの言葉です。「人生は神さまからのプレゼント、生き方は神さまへのささげもの」。私たちは神さまから賜物としてこの人生をいただき、ささげもの（賜物）として神さまに生き方をささげていく。確かに「賜物」には両方あるのです。野田洋次郎はクリスチャンではないので、この命を自分たちに与え、最後は返すことになる「方」のことは何も語りません。しかし私たちは、一人ひとりに命を賜物として与えてくださった神を聖書を通して知らされています。その神は命の造り主であり、救い主である方。「わたしは初めであり、終わりである」と自己紹介されている神。つまり一人ひとりの命の「初め」に祝福と愛を注ぎ、命の「終わり」に私たちの弱さ、愚かさをすべて受け止める「贖い」をもって立たれている方。私たちの命は、この愛なる神の祝福と贖いにしっかり包まれているのです。私たちの目には神の愛がまったく見えない時にも、「初めであり、終わりである神の愛」から私たちが漏れることは決してありません。その神の深い愛に応えるような生き方をそれぞれ神にささげていこう。「賜物」として神からいただいた命を、生き方という「賜物」（ささげもの）として神にお返ししていこうと、聖書は私たちを招いているのです。

そのことを思いめぐらす中で、今朝のマルコ 10 章の主イエスの姿が立ち上がってきました。主イエスはこの場面で、幼い子どもとその親を邪陰に扱おうとした弟子たち

に対して憤られました。この憤りは大切な、簡単に通り過ぎてはいけない憤りです。このとき主イエスのもとに「祝福を祈ってほしい」と幼子を連れてきたのは、貧しく、その日暮らしを余儀なくされていた最下層の人々だったと思われます。というのは、豊かな人々がイエスのように素性の怪しい者のところに子どもを連れてくるわけがないからです。ところが、そのような貧しい人々を邪険に扱った弟子たちに対して、主イエスは憤られます。「君たちの、命に対する向かい合い方は間違っている!」。神に対してどれだけ貢献し役に立っているか。自分の知識や能力を誇り、その一方で未熟で小さく見える存在を軽んじる生き方は間違っている。命を、人の視点から見るのではなく、神の視点から見る。神が、その命をどれほど愛し、大切に思い、可能性を見ておられるか。神の愛のまなざしの中で、一人ひとりの命を見ていく。その愛と可能性のまなざしを学ぶ中に神の国はあるのだと、弟子たちに厳しく教えられたのです。

この神の愛のまなざしは、自分が大きいと見えません。自分は神を正しく理解し、良い働きをしていると勘違いしている間は見えません。逆に、自分が小さくされているとき、神の愛のまなざしが見えてきます。そして神の恵みに対する感謝があふれてきます。ところが、この時の弟子たちは自分がすっかり大きくなってしまって、「神の国」で一番大切な基本を見失っていたのです。それゆえ主イエスは、弟子たちの前に、小さな子どもたちを抱き上げ、祝福し、この小さな存在にどれだけ神の愛と祝福が注がれているか。神の前に、この小さな子どものようにならない限り、弟子たちは決して神の国には入れないことを教えてくださったのです。

主イエスの教会は、この神の愛のまなざしを繰り返し聖書から学ぶ群れです。大人は社会経験を積むにしたいが、弟子たちと同じような勘違いに陥るところがある。己の小ささを忘れ、自分を大きくして、神の愛のまなざしを見失ってしまう。だから繰り返し子どもたちを真ん中にして主イエスから学ぶ。ここに教会の教育があります。もちろん大人が子どもたちに教えるべきこともたくさんあります。けれども神の愛のまなざしを学ぶという点においては、大人も子どももない。むしろ大人の方が見失っていることの方が大きかったりする。ですから、あけぼの幼稚園は、子どもへの教育と同時に、保護者教育（聖書に共に学ぶ）を大切にして、子どもと一緒に、大人である私たちが聖書の主イエスに学ぶことを大切にします。

昨今の「少子化」と「共働き世帯の増加」の波の中で、「事業」としての幼稚園は厳しい時代を迎えています。しかし、私たち大井バプテスト教会は「事業」としてではなく、聖書からいただく「使命」として幼稚園の働きを担ってきました。「時が良くても悪くても、御言葉を宣べ伝えなさい」（第二テモテ 4:2 口語訳）。教会としての「使命」を聖書から繰り返し受け取り、教会付属幼稚園の働きを大切に担っていきたいのです。